



Title	産業地域事業団（IAF）のプログレッシブ・ポリティックス：アメリカにおける草の根民主主義の実践に向けて
Author(s)	河田, 潤一
Citation	阪大法学. 2011, 61(3,4), p. 37-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

産業地域事業団（IAF）のプログレッシブ・ポリティックス ——アメリカにおける草の根民主主義の実践に向けて——

河 田 潤 一

—はじめに

著名な言語学者ノーム・チョムスキーや、ある講演会において、「人間関係が疎遠になると、政治的にも孤立していくことがありますよね」という男性の質問に答えて、「ひとつの目標に向かって闘っているうちに、人生の不愉快な面の多くが姿を消し、固い絆が生まれるので……（中略）……ですからあなたの質問に対する最善の答えは、ほかの答えと変わらないと思います。つまり、安定した市民運動組織を立ち上げ、思いやりと献身と活動とが重んじられる文化を創り出す」と述べている。

アメリカ合衆国は、トクヴィル（Alexis de Tocqueville）以来、自発的結社を市民生活の重要な一部とする「結社好きな国（nation of joiners）」とされ、⁽²⁾いた。しかし、政治学者のシーダ・スコット・ポルによれば、アメリカは組織者の国であっても、今や「結社好きな国」からは縁遠くなってしまい、専門家が運営する市民組織の「マネージメント」手法が際立つようになり、民主主義は「失われた（diminished）」、と診断される。

一九六〇年代の公民権運動やベトナム反戦運動も七〇年代には急速し、「権利や正義」を叫ぶアドボカシー・グループの活動が増大した。スコッチボルにとつては、こうしたグループによる「新しいリベラリズム」は、ロビーアクションの影響力という点では大きな力を發揮するものの、一般市民の多数との接点は希薄で、そこに生み落とされる市民社会は相当に特權的で、高度に個人主義的な専門家が管理している、とされる。そのことは草の根保守も同じことで、声高に主唱される「権利や正義」を道徳的に攻撃しはするが、メディア操作に長けた指導者が「管理」していることに変わりはない。⁽³⁾

こうした暗黙のなかで、黒人やラティーノらの六〇年代型マイノリティ運動や七〇年代型の近隣住区運動の流れを引くプログレッシブ（進歩的）な草の根グループが増加しているのもまた事実である。ジョン・ハーバーズは、こうした状況を捉えて次のように論じている。「左派系の積極的な行動は、一〇年ほど前、数百万という市民が伝統的な政治体制に失望したときに始まる市民運動から派生している。彼らは数千人という単位で、近隣あるいは一地方、または州ごとの団体を組織して直接行動を起こし、住宅、税金、保険、環境、燃料費、女性や少数民族の権利などに関して、強大な政府と大企業のもたらす弊害について、法廷闘争を始めた。彼らはいま、労働組合や農民運動団体といった旧タイプのリベラルな勢力とも提携し始め、闘争の幅を広げつつある。さらに重要なのは、おそらく三年前だつたら実現不可能だと思われる人念な候補者支援体制をつくり、選挙という政治の舞台に登場してきたことである」。⁽⁴⁾

スコッチボルは、「失われた民主主義」を再生するには、アメリカ民主主義の培養基と考えられてきた「自発的結社の芸術」を革新的な方法で再定式化し、力強く再活性することが急務であると主張し、ハーバーズがいう左派、進歩派の積極的な行動に期待する。そのなかでも、「産業地域事業団（Industrial Areas Foundation、以下、IA

Feu略記)」の活動とその組織体としてのパワーに最大の期待が寄せられてゐる。⁽⁵⁾

IAFが、草の根民主主義を「幅広い基盤に基づいた組織化 (broad-based organizing)」を通して再活性化すべく、全米的に努力し続けてきた点では特筆すべき存在で、チョムスキーやスコッチボルの期待ばかりではなく、人間関係から疎遠になり、政治的に孤立する多くの普通の市民の期待にも心えつるもの、と考えられる。

II 産業地域事業団 (IAF) の展開

(1) アリンスキー時代

IAF (産業地域事業団) は、一九四〇年にソール・アリンスキー (Saul D. Alinsky, 1909-72) によってシカゴで創設された。その幾分アナクロな名称は、CIO (産業別労働組合) の伝統のなか結成された「バックヤード近隣地区会議 (Back of the Yards Neighborhood Council 以下、BYNCと略記)」にルーツがある。Industrial Areas Foundation は、産業 (industry) に取り囲まれた地域／近隣住区 (areas) で組織された事業団を意味するのである。⁽⁶⁾

一九二〇年代からシカゴでの労働者や貧民の近隣社会の組織化に取り組んできたアリンスキーは、シカゴ・サウスサイド地区をベースに、一九三九年にBYNC (バックヤード近隣地区会議) を結成した。同地区は、作家アプトン・シンクレー (Upton B. Sinclair, 1878-1968) が、シカゴ家畜市場の調査体験に基づいて描いた、マックレー カーズ文学の代表作『ジャングル (The Jungle)』(一九〇六年出版。邦訳は何種類かある) の舞台であった。「憎悪の巣窟 (hell hole of hate)」と呼ばれるスラム街の貧困、犯罪、住宅、失業問題への対応と問題解決が、BYNCの取り組むべき課題であった。

シカゴに生まれたカリスマ的なコミュニティオーガナイザーのアリンスキーは、食肉加工卸売業者の労働組合とカトリック教会との間に前例を見ない協力関係を作り出し、シットインやボイコットといった直接行動主義に訴え、会社側からいくつもの譲歩を引き出した。労働組合、教会、あるいは小規模ビジネスを巻き込んだ底辺からの運動は、貧民にも自尊心、政治的な力能感を与えることに資した。しかし、活動の恩恵の多くに沿したのは、家畜市場で働く周辺白人 (white ethnic) 労働者であった。五〇年代に激化する人種対立は、BYNCにも影を落とし、同団体はついには、「社会変化を生み出すパワーワーク」というよりは人種差別主義者の保守的な近隣住区保護組織に変貌してしまった⁽⁷⁾。

アリンスキーは、BYNCを創設した翌年の一九四〇年に、司祭バーナード・シェイル (Bernard J. Sheil) や慈善家のマーシャル・フィールド (Marshall Field, III) の協力を得てIAF (産業地域事業団) を立ち上げた。IAFは、一九四〇年代後半から五〇年代にかけて、エリー湖畔に立つ鋼鉄産業の中心地ラッカワナをはじめ、モンタナ州南西部の鉱山の町ビュート、マンハッタンのチャーチー地区でオーガナイザーを雇い、彼らの訓練に取り組んだ。同時に、南カリフォルニアにおいては、IAFが資金面、人材面で支援した「コミュニティサービス団体 (Community Service Organization、以下、CSOと略記)」が一九四七年に結成された。後に、「統一農場労働者組合 (United Farm Workers、以下、UFWと略記)」の指導者となるセサール・チャベス (César Estrada Chávez, 1927-93) も、CSOで最初にオーガナイザーとして訓練を受けた一人であった⁽⁸⁾。

心臓発作で一九七一年に亡くなる直前、アリンスキーはシカゴで彼にとっての最後のプロジェクト「市民行動計画 (Citizen Action Program)」の結成に腐心した。市民行動計画は、「対決的な戦略と法廷闘争を通じてシカゴ市の高速道路建設を中止させたり、シカゴを中心にイリノイ州北部に電力を供給しているコモンウェルス・エジソン

社に大気汚染の改善策を強制したり、スラム地区の不動産担保融資を拒否する銀行に対抗する法律を制定したりした^⑨。

さて、一九四〇年にシカゴで結成された IAF（産業地域事業団）であるが、一九六〇年代には米国北部、東部を中心に活動を広げ、アリンスキーカリスマ性も手伝って世の耳目を集めることとなっていた。

社会は対立・紛争そのもので、コミュニティ組織はそうした認識の上に政治的パワーを獲得しなければならない。権力者を妥協に追い込む政治的な組織としてコミュニティ組織を位置づけなければならない。その手法は戦術的で、分裂的争点は巧みに回避しつつ、地元コミュニティの利益を守る組織。IAFは、貧者の地域のど真ん中に自立的で闘争を厭わない民衆運動体を建設しなければならなかつたのである。

だが、「不運にも、貧困な多くのコミュニティが近づきうる唯一の包摶的な手段は、シカゴのデイリー・マシンのような地元マシーンの情実政治だけであった」。アリンスキーカトリック教会、街路クラブ、小規模ビジネスなどの社会的組織から協力を得つつ、「そうした接近政治とは違つたやり方で、すなわち独立した政治的パワーを獲得し、行使することによつて、人びとを政治に結びつけようとした」。IAF組織を通じて市民たちは、政党マシーンや行政、民間アクターと衝突しながらも、自分たちが支援する近隣住民のための交渉を可能としたのである^⑩。

IAFの戦術は急進的であつたとしても、運動はシステム転覆を目指す革命的なものではなかつた。地元の社会的制度をその土地の指導者が動かすプラグマティックで、非イデオロギー的な組織であつた。しかし、時間を経る間に、IAFはアリンスキーカリスマの努力にもかかわらず、その「草の根参加」的性格を次第に失つて行く。BYNCはデイリー・マシーンと協調し過ぎた。一九六六年に「ウッドローン実験学校プロジェクト（Woodlawn Ex-

perimental School Project)」を組織したIAF団体「ウッドランズ・オーガニゼーション (The Woodland Organization、一九六〇年結成)」も地域の経済開発に重点を置き過ぎ、当初の草の根参加的性格を失いつつあるところだ。

(2) 公共サービス推進口マイティ協会 (COPS) とテキサス産業地域事業団

アリンスキーやの死後、リーダーシップを引き継ぎ、IAFの再建に取り組んだのは、アイオワ出身のエドワード・チャンバース (Edward T. Chambers, 1930-) であった。彼は、一九六〇年代初めのロチェスターでのIAFの組織化の成功の立役者であり、アリンスキーやの影響力のある著作 *Rules for Radicals: A Practical Primer for Realistic Radicals* (New York: Random House, 1971) は、チャンバースのロチェスターでの粘り強い活動経験を大いに参照している⁽¹⁾。

チャンバースは、アリンスキーやが政治教育や人間的成長を具体的な戦術に十分落とし込んでこなかつた、との反省に立ち、従来IAFが基盤を置いてきた教会、会衆団体のベテラン聖職者にオーガナイザーやリーダーを引き受けよう依頼し、ユダヤ・キリスト教的伝統の解放的流れを人間教育に引き寄せようとした。また、公民権運動やUFW（統一農場労働者組合）などにロケットした経験を持つ人たち、特に女性を対象にオーガナイザーやリーダーとしての訓練を受けさせた。

チャンバースは、こうして十分な訓練を積んだオーガナイザーやリーダーを通して、地域の教会や学校、あるいはPTAやソーシャルクラブとの関係をいっそう密なものとし、ミドルクラスをも含む多様で複雑な地域社会のニーズや問題に応えようと努力した。アリンスキーやが得意とした舌鋒鋭い現状への劇的な批判・攻撃よりは、相互

利益に基づく協力を通じたパワーの増強を目指す組織化の方法を重視し、彼なりにアリンスキーの限界を超えるようとした。

チエンバースの指導が効いたのか、米国北部の都市近隣住区におけるIAFの活動はより活発なものとなつて行つた。IAFの活動の範囲は、近隣住区のみならず、大都市圏、州大のレベルに広がつて行くのである。

その勢いを加速し、アリンスキー発の実践的な草の根民衆組織IAFを、米国北部を超えて南西部、西部、あるいは州間を超えての全米的な存在へと新生させたのは、テキサス州サンアントニオ生まれのアーネスト・コル特斯（Ernesto Cortes, Jr., 1943-）であり、彼が同地に創設した「公共サービス推進コミュニティ協会（Communities Organized for Public Service’ 以下、COPSと略記）」であつた。コル特斯の才能をいち早く見抜き、組織が自由闊達に多くの欠点を自ら批判しうる健全な文化へと成長した時期に、彼をIAFに招き入れたのは、もちろんチエンバースであり、二人三脚の活動はその後も続く。

コル特斯は、地元のセントラル・カトリック・ハイスクールを卒業した後、一九五九年にテキサスA&M大学に入学し、英語と経済学を専攻した。一九才で同大学を卒業した後、テキサス大学オースティン校に進学し、大学院で経済学を専攻した。彼は、在学中にメキシコ系アメリカ人による「褐色の民」＝チカーノ運動に関わつたり、サンアントニオでの反貧困プログラムに関与したりした。

メキシコ系住民の政治的エンパワーメントを追求するコル特斯は、その後、活動の舞台をサンアントニオ以外にも広げ、テキサス州南東部のボーモントの黒人教会をベースとした公民権運動を支援したり、「リオ・グランデ・ヴァリー統一農場労働者組合（UFW）」の組織化に取り組んだりした。特にUFWの活動を通じて知己を得た口サンジエルスのIAF組織CSOのオーガナイザー、ギルバート・パディラ（Gilbert Padilla）の存在は、その後

のコルテスにとつて重要な意味を持った。

ハウスマーティング方式によってCSOをカリフォルニアの移民農業労働者の間に拡大した伝説的なIAF指導者フレッド・ロス (Fred Ross)⁽¹²⁾ や、六〇年代に米国南西部でストライキや特定農産品の不買運動などを通じてメキシコ系農業労働者の権利獲得と待遇改善を指導したセサール・チャベスの組織化方式を学び、リーダーシップのスキルを身につけたのもパデイラのお陰であった。

コルテスは、一九七一年からの二年間、サンアントニオとシカゴの間を行き来し、サンアントニオの仲間たちとシカゴで開催されていたリーダーシップ訓練のセッションに参加したり、ミルウォーキーやイーストシカゴでIAFの組織活動にも参加している。七四年一月には、サンアントニオでのIAF組織の会員団体となる可能性があるメソジストや聖公会、長老派、カトリックの聖職者からなる資金支援委員会を設立するために北部から生まれ故郷のサンアントニオに戻ってきた。

帰郷後、早速コルテスは、一九五五年から七五年まで同市を牛耳ってきたアングロサクソン系政治家や大規模ビジネスがつくる「良き統治連盟 (Good Government League)⁽¹³⁾」に対抗するために、メキシコ系アメリカ人の政治的エンパワーメント組織の結成に取りかかった。「良き統治連盟」は、長年にわたって経済優先の都市再生プロジェクトを主導し、貧民のニーズや意見は無視され続けてきた。

コルテスはエンバース以上に、大企業や専門家が支配してきたエスタブリッシュメントの世界に対抗しうる普通の市民の政治的能力の開発を重視した。その結果誕生したのが、テキサスIAFの第一号組織「公共サービス推進コミュニティ協会 (COPS)」であった。COPSの創設大会は、一九七四年一一月二四日、ヒスピニック系住民が多いウェストサイド地区のジェファーソン・ハイスクールで行われた。二千人以上の市民、二七の教会の代

表が参加した。

こうして生まれたCOPSは、サンアントニオ市の予算に口を出し、代替予算案を提起した。不買運動などの直接行動によって市や企業に圧力をかけるのも常套手段となつた。最初は不快感を露わにした「良き統治連盟」の面々も、COPSの組織的圧力を無視することはできなかつた。ウェストサイド地区に対する一億ドルを超える公共投資などはその成果の一つである。

サンアントニオの権力中心への決定的打撃は、一九七七年に訪れた。選挙での人種的不均衡を正すために市会議員選挙を大選挙区制から小選挙区制へと変更する選挙制度改革が議題に上り、「良き統治連盟」の白人・エリート層が反対するなか、COPS票がこのレフアレンダムを勝利に導いた。新しい選挙制度のもとで行われた同年の選挙で、COPSは市議会に五名のメキシコ系アメリカ人、一名の黒人を送り込むことに成功した。「COPSがアーリンスキーの非党派的な戦略を維持しつつ、その投票基盤を通じて選挙に影響を及ぼした」¹⁴⁾ 最初の瞬間であつた。こうして、一九五五年以降サンアントニオを支配してきた白人・金持ち連合の「良き統治連盟」は、「一九七三年に衰退し、七五年に瓦解し、七六年には正式に組織として解散するのである」¹⁵⁾。

その後、COPSは補助金の獲得を重視し、サンアントニオのコミュニティ開発一括補助金プログラムへの介入を通じて影響力を發揮して行く。また、COPSの資金源としての市債利用は、COPSが提携団体を設立してくく上でなくてはならない財源となつた。さらに、貧しい住民への住宅や保健所などの建設のために資金協力してくれる会衆、財団も見つけた。例えば、一九九四年には、こうした公共サービスの実現のために、様々な所から一〇億ドルを集めている。

COPSの一九七九年の年次大会の統一テーマは、「サンアントニオCOPS対低賃金労働」であり、会場には

六千人以上の会員がつめかけた。一九八二年には、カトリックやメキシコ系住民の貧しい移入労働者が多い低地リオ・グランデヴァレーに、IAF組織「ヴァレー・インターフェイス (Valley Interfaith、以下、VIと略記)」を創設した⁽¹⁶⁾。下水道の補修と給水システムの建設に一億ドルを獲得した。COPSやVIを通じて何万という人びとが、「教会の立場で経済を扱ったワークショップに参加した」⁽¹⁷⁾。

こうした実績を積み上げることによって、COPSは極めて重要な草の根民主主義の実験室となつて行く。その点で政治的に画期となつたのが、一九八三年の創設一〇周年記念大会で行つたコルテスの基調演説であつた。一万人都を超える聴衆を前にして次のようにコルテスは語つた。「今日、サンアントニオは、全米で最も開かれた都市の一つとなつています。多元主義、家族、そして言論と集会の自由といった価値が、一つの具体的な現実となつてゐる場所です。……〈中略〉……あなた方は、民主的な社会の外にいた人びとをコミュニティの生活に誘い入れてくれました。そして、あなた方は、そうした人びとが人間の尊厳と自尊心を育てる触媒となつてゐるのです」⁽¹⁸⁾。ブルックリンやロサンゼルスから駆けつけた代表たちは、COPSの実効性を再確認し、以前にも増してIAFの役割の重要性に思いをいたした。

IAFの最有力傘下組織となつたCOPSは、その後も、テキサス州における姉妹組織の設立に奔走した。その結果、テキサス州南東部のヒューストン、北東部のダラス、北部のフォートワース、西部のオースティン、エルパソ、ラボック、アマリッリ、ミッドランド／オデッサ、ヒューストン南西のフォートベンド郡、低地リオ・グランデヴァレー、南東部のボーモント、ポートオーサー、オレンジ地域、南西部のデルリオ、イーグルバスなど、二〇〇〇年までに一二の地方組織を擁するまでになつた。

テキサスIAFの発展の要因をデニス・シャーリーによつてまとめおくと、次の二点が重要となつてこよう⁽¹⁹⁾。

(1) 一九七〇年代、八〇年代における旧来の都市レジーム＝政治・経済エリートの密室政治の崩壊、サンアントニオの「良き統治連盟」的な体制（フォートワースの *Seventh Street Gang*、ニューストンの *Suite 8F Crowd* など）の崩壊、民族的により多様な政治的指導者の出現（マイノリティの有権者やリーダーとの協調⁽²⁰⁾）。(2) 教区⁽²¹⁾との動員。教区の重視は、権力核を含めた他のパワー保持者との協力関係を構築する上で不可欠な基礎的共同体と認識された。(3) 身近な問題（下水道問題、悪臭問題）への取り組みを優先した点。この種の問題はコミュニティ全体に関わるため、「合意の政治」を不可欠とする。

テキサスIAFは、立ち上げ当初は組織の体系性という点ではお粗末な状態にあつたが、今見たような、政治的環境の変化、「合意の政治」戦略⁽²²⁾によつて、米国北部（強い労働組合と労働者階級活動主義の長い伝統を持つ近隣住区が多い）とは違つて、宗教組織は強いが組織化された労働が弱い米国西南部でテキサスIAFは成長を遂げ、「進歩的なコミュニティの宗教的関与と都心部における政治的な組織化の努力の結合モデル」となつて行く。アリゾナ州のフェニックス、トゥーソン、テンペー、ニューメキシコ州中部のアルバカーキー、ネブラスカ州のオマハ、アイオワ州南部のデモイン、ルイジアナ州のニューオリンズなどにIAFは広がつて行く。この中西部ネットワークの活動を強化するために、IAFは、一九九六年に本部をニューヨーク（一九七九年から本部）からシカゴに移している。こうした経緯を辿つてIAFは、二〇〇〇年には二三三の団体が加盟し、四八の傘下組織を誇るまでになつた⁽²³⁾。現在では、全米二二州に五七の組織を置き、カナダ、イギリスやドイツにも姉妹組織がある。

三 産業地域事業団（IAF）の組織構造と活動

（1）組織構造

IAFは、国内を半ば自立的な五つの地域（東部、南東部、南西部、中西部、西岸部）に分ける。地方のIAF組織は、全米に約二千ある会員団体からなる。会員団体とは、教会会衆、学校、労働組合、その他の「コミュニティに基づく組織（community-based organization）」であり、諸個人は所属団体を通じて活動を行う。創設当初のIAFやBYNCがカトリック教會をベースとしていたように、アリンスキー以後のIAFも「信仰に基づく組織（faith-based organization）」であることに変わりはない。²⁴⁾会衆団体の比率は地域によって異なるが、テキサスIAFの場合、カトリック、プロテスチント（バプティストが多い）とユダヤ教にほぼ三分される。IAFの主たる財政基盤も会衆団体、教会が払う会費である。年会費は教会によって違うが、五百ドルから一万ドル程度である。カトリックの人間発達キャンペーン（Campaign for Human Development）やフォード財団、ロックフェラー財団なども資金提供団体として重要な役割である。²⁵⁾

大半の地方IAFは、二〇から六〇の会員団体を擁する。ちなみに、最大の会員団体を擁するのはシカゴのIAF組織「行動と正義のための統一パワー（United Power for Action & Justice）」であり、その数は一百に上る。地方組織と全国IAFとの関係は、単なる連携関係ではなく、全国IAF理事会・執行委員会、執行ディレクター、地域ディレクター、地方IAFのオーガナイザー、コミュニティリーダー、個人メンバーにタテ・ヨコに「参加と権威」の契機を組み入れた「ハイブリッド」な連邦的代表構造を持つ。

全国本部は、地方組織との契約に基づき、トレーニングサービスを提供したり、専門のオーガナイザーを派遣す

る。但し、本部には、オーガナイザーにつくスタッフに対しての指導権はない。また、各地域のスタッフは地域ディレクターが監督する。コルテスも南西部IAFの地域ディレクターである。コミュニティリーダーはIAFの正規スタッフからではなく、団体会員から広く集められ、選ばれた後は、単一の組織で無給で働く。

オーガナイザーの主な仕事は、会員団体に対してトレーニングやリーダーシップ開発を提供したり、会衆のてこ入れを手伝ったり、あるいはメンバーである聖職者や平信徒のリーダーが決定した問題について政治分析を行ったり、活動戦略を提供することにある。⁽²⁶⁾ テキサスIAFを例にとて具体像を得ておこう。テキサスIAFでは、トップ・オーガナイザーと呼ばれる一〇名が大都市圏（ダラス、ヒューストン、オースティン、エルパソ、フォートワース、サンアントニオ）、郊外地域（フォートベント郡、ヒューストン南西部）、農村部（リオ・グランデヴァレー）での組織化の全責任を負う。彼らは、一〇年以上のコミュニティ活動、労働組合運動の組織化の経験を積んだベテランであり、年俸は五、六万ドルである。経験年数が少ない平のオーガナイザーは、主として教育問題や健康問題を扱う。問題が身近な問題であるため、活動対象がヒスピニック・コミュニティの場合であればスペイン語能力、黒人地域の場合には本人が黒人か、それなりの対応能力が望まれる。

オーガナイザーはコミュニティリーダーと協働し、ハウスミーティングを開催したり、種々の戦略活動、計画達成評価のリズムを作っていく。協動作業を通して教区会員や近隣住区のコミュニティリーダーが求める部分利益を、「現場の政治」の創発性を駆動することによって全体利益にまとめて上げる努力をする。⁽²⁷⁾ 成果として、一九八〇年代に実施した教育改革や、国境沿いの掘つ立て小屋（colonias）への給水サービス事業などを得るが、マーク・ウォレンは、成功の社会的基盤として、ヒスピニック系カトリック教区（compadre/comadre）の濃い人間関係や豊かな社会資本（social capital）の存在を指摘している。⁽²⁸⁾ オーガナイザー、コミュニティリーダーが各レベルでの責任

をもつて協働して計画を立案し、行動を起^るし、政治家や公職者に政策提言、あるいは説明責任を求めていく。IAFは、「会衆の連合体 (confederation of congregations)」であると同時に「諸組織の組織 (organization of organizations)」⁽²⁹⁾なのである。

(2) 活動

IAFは、一対一の対面的な対話を重視する。なかには一時間にも及ぶ一者間での時間の共有は、各人の意見に耳を傾けるという行為を通してお互いが描く（あるいは思い込んでいる）公的 세계についての意見を交換し合う。アリンスキー時代のIAFがいつも同じ顔の少數の制度的リーダーに依存していたのとは違つて、「聴くアート」としての対面集会は、COPS以後の刷新されたIAFの「関係的組織化 (relational organizing)」を底辺から支える基盤となる。

組織の権威とメンバーの参加を創発的に確保しようとする「関係的組織化」は、「コミュニティリーダーが行動への共通基盤を一緒になって見出し、またより幅広いコミュニティの利益のために活動する能力の開発のために働く」⁽³⁰⁾。コルテスは、パワーを一方的 (unilateral) なものではなく関係的 (relational) なものとして捉える。⁽³¹⁾ そうした関係的パワーを連邦構造型に組織化する⁽³²⁾と、普通の市民や納税者が、彼らのコミュニティにおいて権力と政治の関係を再編成しうる能力と自信を築き⁽³³⁾、そのことを通じて民衆の政治的なエンパワーメントに資するのである。

多くの運動やコミュニティ組織化は、提起した問題を解決したり、法律を制定したとしても、人ひとはいつも通り無力 (powerless) で孤立したままである、)とが多い。「良き草の根団体」の代表とIAFを見る向かいあるが、

その種の観察は、IAFネットワークに染み渡る権威構造には無頓着である、とウォレンは批判する。⁽³³⁾ 従来の「良き草の根団体」の弱点を克服するために、組織構造内に命令・権威関係を組み込んだ「関係的なコミュニティの組織化（relational community organizing）」を通じて、IAFは「政治的パワーの根本的問題に取り組む」。⁽³⁴⁾ 「敵対を交渉に、パワー・ポリティックスを共同体的な政治的言説に、人種的に同質的な宗教団体を多人種的な地元系列組織内に、広い民衆参加を中央の権威に結合する」。⁽³⁵⁾ こうしてIAFは、「民主的生活を再び元気つけ、諸政治制度を、働く人びとや彼らのコミュニティのニーズや野心に再び結びつけることに向けてのアメリカの最善の希望の一つを表すものとなるのである」。⁽³⁶⁾ 民衆が、自分たちの住むコミュニティの問題に決定権を取り戻し、地方の権力関係を少しずつ変質させて行くのである。

四 おわりに

一九八〇年代、九〇年代に進行したグローバル経済化は、もともと社会民主主義と疎遠なアメリカ政治に、新自由主義あるいはニュー・エコノミー的な政策をとらせ、労働組織の力を殺ぎ、「底辺への競争」を激化させた。時代は新保守主義的な潮流とも絡み、自己責任論をはばからない貧困化と社会・文化的な両極化を拡大した。そうしたなか、新保守主義のように問題の解決を米国の伝統や道徳に訴えるよりも、実際的な問題を幅広い多様な支持基盤を得ながら、その解決を目指して行く、草の根的な市民活動組織も多く見られるようになつたことは既に述べたところである。

IAFは、それら多くの脱政治的な「良き草の根団体」とは異なり、十分にコミュニティに根を張って組織され、権威構造を内在化した組織であり、従来、政党が政治システムに対し行ってきた媒介組織の役割を果たす多人種

的で異宗派間的な全国的ネットワーク組織である。^{〔37〕} IAFは、伝統的な政治的提携を避け、多様な基礎支持層群を、貧困層・労働者民衆の実際的で即時的な問題のは正に向けて、プラグマティックに結集させる努力を払い続けてきたのである。

会員、会員団体、地元リーダー、争点キャンペーンの方法についてコミュニティリーダーを訓練するオーガナイザー、地域IFA、全国執行委員会へと多重に組み込まれた権威階梯は、各自が培った活動・経験をヨコヘタテへ、そして上下につなぎ、それら諸結節点で培われた人間関係をベースに上位の役員が選出され執行部に結合するのである。こうしたIAFの連邦型代表制システムは、「民主的政治への一つのダイナミックな介入の形態を生み出す参加と権威の結合体となる。ネットワークは、時と場所によってどちらかにぶれることもある。しかし、その作用の鍵となる重要な相互学習は、より幅広い参加的組織に十分根付いた権威的リーダーシップから出てくる」とに強みがある。^{〔38〕}そこでは、「階級的構成」自体が問題なのではなく、「権威がより幅広いコミュニティにとって正当で、包摂的で、アカンタブルであるかどうか」が問題の核心となるのである。

スコッチボルもいうように、今日の市民組織に要請される重要な課題は、民主的なガバナンスと多数の市民の市民的関与の結合を可能とする代表制システムを介して自己統治する草の根結社の間のつながりを強化する方途の発見であり、特定の場所やコミュニティを超えた結社・ネットワークの構築、多数の仲間・市民を組織する市民リーダーの育成、連邦型代表制による意図決定をベースにした全般的なパワービー、社会的な力の増強に向けての政治的な結合、民主的な包摂的動員である。^{〔39〕}

本稿で紹介した産業地域事業団（IAF）のような草の根民衆組織は、スコッチボル、ウォレン流にいえば関係的組織化を幅広い社会的基盤をベースにした創発的プラクシスのなかに「埋め込んだ（embedded）」、多様なメン

バーをベースとした多層的なリーダーシップ構造を備えた連邦的代表型組織、全国的連合体であり、そぞした民衆組織によるプログレッシブ・ポリティックスの実践だからこそ、グローバル化した国家と市場との揺れのなかで、「人間関係のネットワークに埋め込まれた社会資本」⁽⁴⁰⁾を政治的にエンパワーしつつ、パワーを建設的に使用する」ことで対立を協調へ、社会的パワーを政治的パワーへと手織り上げる市民社会の拡充に大きな役割を果たしうる」とが期待されるのである。⁽⁴¹⁾

* 本稿は、平成二二二二四年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「社会資本・信頼・エンパワーメントの政治学——アメリカ・イタリア比較を中心として」（研究代表者・河田潤一）の研究成果の一部である。

- (1) Peter R. Mitchell and John Schoeffel, eds., *Understanding Power: The Indispensable Chomsky*, New York: The New Press, 2002, p. 213-214. [田中美佳子訳『現代世界で起るべき——ヘーム・チャムスキーとの対話』、一九八九—一九九九年] 日経BP社、一〇〇八年、三五〇—三五一页]。
- (2) Theda Skocpol, *Diminished Democracy: From Membership to Management in American Civic Life*, Norman: University of Oklahoma Press, 2003, pp. 271-273. [河田潤一訳『失われた民主主義——メンバーシップからマネジメント』『慶應義塾大学出版社』、一〇〇七年、一三三三一三五頁]。

- (3) ハーフニー・マコーリーの点を次の通り述べてある。「保守派の市民団体の組織上の設計に重大な欠点がある」と
存在するとするれば、それは保守派の市民団体のあまりに多くがその団体の創始者の政治行動主義を実行に移すための私的な手段になってしまっており、という点である。……〈中略〉……指導者たちは自分を中心とした組織を確立していくのであって、自分たちの指導的地位に何らかの変化があったときに継続的な成功を生み出すような、強力な組織体を発展させねばならぬと求めてしまう」 [Jeffrey M. Berry, *The New Liberalism: The Rising Power of Citizen Groups*, New York: The Brookings Institute, 1999, p. 150. [松野弘監訳『新』] リバリズム』 ネルヴァ書房、一〇〇

○九年、11月11日付)。

- (4) John Herbers, "Grass-roots Groups Go National," *The New York Times Magazine*, September 4, 1983. [鈴木健次訳 「草根組織の根幹へと舵轉」] [TRENDS] 1九八四年四月號 119頁]。

(5) Skocpol, *Diminished Democracy*, *op. cit.*, pp. 271-273. [福岡訳 111111-111111頁]。

- (6) Mark R. Warren, *Dry Bones Rattling: Community Building to Revitalize American Democracy*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 2001, p. 43.

(7) Robert Fisher, *Let the People Decide: Neighborhood Organizing in America*, Updated edition, Boston, MA: Twayne Publishers, 1997, p. 62.

(8) ヤギル・チャズカム(トマト)、例えども、本田勝洋『(トメロカ人)の犠牲』(トマト・ヘーリー・ハーリー)――「非合法移民問題」の社会文化史 東京大学出版会 1100七年、第五章、第六章を参照。メキシコ系アメリカ人の政治化作用 (politicization) 120-125。Joan W. Moore, *Mexican Americans*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1970, Chapter 8が簡便。メキシコ系トマトカ人の生活の調査面を知るなら、モモロジが大著 Leo Grebler, Joan W. Moore, and Ralph C. Guzman, *The Mexican American People: The Nation's Second Largest Minority*, New York: The Free Press, 1970を有請。

(9) Herbers, "Grass-roots Groups Go National," *op. cit.* [前掲訳論譯文 四] 頁]。

(10) Warren, *Dry Bones Rattling*, *op. cit.*, p. 45.

(11) 1) ハーベク(ロヨ・チャスター・ハーベース)・ロダック社を中心とするカメラ・フィルム、光学機械の販売など知られ、「ロダックの壁」の異名がある。他のロダック社における人種差別問題に対する、IAF(イー・アンド・エフ・エフ・フリーフリーハーベス) (Freedom, Integration, God, Honor, Today) を結成し、アリンスキーがハッカワナのIAFで活動を始めたチヨンバースを黒人を組織するオーガナイザーの責任者に任命した。チヨンバースが、1) ハーベクのハーベスにおける借家人の組織化やアーハベスが注目された人物だね。Paul Osterman, *Gathering Power: The Future of Progressive Politics in America*, Boston, MA: Beacon Press, 2002, p. 24 が良。

(12) ハーベス・ロバが開発したハウスマーティング方式が、集めた人们との話をお互に共有し合ふ、関係性を形成す

ノア・スミス著「アーリー・サン・アントニオの政治」。

- (13) 「最初の統治連盟」ノア・スミス著 Tucker Gibson, "Mayoralty Politics in San Antonio, 1955-79," in David R. Johnson, John A. Booth, and Richard J. Harris, eds., *The Politics of San Antonio: Community, Progress, and Power*, Lincoln & London: University of Nebraska Press, 1983, pp. 114-129 に詳しく述べる。

- (14) Warren, *Dry Bones Rattling*, *op. cit.*, p. 54.

- (15) John A. Booth and David R. Johnson, "Power and Progress in San Antonio Politics, 1836-1970," in Johnson, Booth, and Harris, eds., *The Politics of San Antonio*, *op. cit.*, p. 24. 一九八一年以降、全米主要都市における最初のメキシコ系アメリカ人市民組織「ヒューリー・レスボロス (Henry Cisneros)」が誕生する。一九七〇年代から約一〇年間で、サンアントニオの市政は大きく変化する。ヒューリーが扶助する政治マハーナムの市民連合は、市議会議員は「多元文化圏連合」(John A. Booth, "Political Change in San Antonio, 1970-82: Toward Decay or Democracy?" in Johnson, Booth, and Harris, eds., *The Politics of San Antonio*, *ibid.*, p. 195) として存在し、少数民族グループが経営する小規模な企業が育成され、「メキシコ系アメリカ人統一会議 (Mexican American Unity Council)」がその存在があった。ヒューリー・レスボロス、同市のシバニック社会がCOAの立場から政治的に組織化された点が市政革新の大きな要因であると指摘している。彼女は「それ以外の要因として、(1) 同市の人口比ドンベリーハウス系住民が多いため、(2) 廉価界の一部の「成長」路線の見直し」に詳しく述べる。世界が改革路線をとる他の団体と提携する形で、彼女は「アーリー・サン・アントニオの政治」を「アーリー・サン・アントニオの政治」に変化させた。Amy Bridges, *Morning Glories: Municipal Reform in the Southwest*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 1997, pp. 204-205)。

- (16) フィル・マーティン著「バーリー・サン・アントニオ」 Dennis Shirley, *Valley Interfaith and School Reform: Organizing for Power in South Texas*, Austin, TX: University of Texas Press, 2002 に詳しく述べる。

- (17) Harry C. Boyte, Heather Booth, and Steve Max, *Citizen Action and the New American Populism*, Philadelphia: Temple University Press, 1986, p. 176. [註文の下・水印] 著者著「アーリー・サン・アントニオの政治」に詳しく述べる。

- (18) Geoffrey Rips, "New Democratic Models," *Texas Observer*, 9 December, 1983, p. 11.

- (19) Dennis Shirley, *Community Organizing for Urban School Reform*, Austin, TX: University of Texas Press, 1997, pp. 36-39 & 45.

(20) 多様性が宗派の点でも同様で、カトリックやメキシコ系住民が多くCOPOS、VIエルパソ異宗教間支援団体(EI Paso Interreligious Sponsoring Organization)、また信仰心が篤い黒人・白人・ヒスパニック系会衆を多く戴くヒューストン、オースティン、フォートワース地域、そして裕福な監督教会ルター派、ヒダヤ会衆が多くフォートワース郡(ヒューストン南西部)となるた具合である。

(21) ヒューストン・マルケスによれば、IAFは、一九八〇年代に組織化の方法として、特定的・階級的・人種的な要求から合意ベースの政治に大きく舵を切った(Benjamin Marquez, *Constructing Identities in Mexican-American Political Organizations: Choosing Issues, Taking Sides*, Austin, TX: University of Texas Press, 2003, p. 64.)。

(22) Warren, *Dry Bones Rattling*, *op. cit.*, pp. 7-8.

(23) Stephen Hart, *Cultural Dilemmas of Progressive Politics: Study of Engagement among Grassroots Activists*, Chicago: University of Chicago Press, 2001, p. 47.

(24) ハートによると、IAFは「民族主義に基づく組織化」と「信仰に基づく組織化」の間に位置する(Warren, *Dry Bones Rattling*, *op. cit.*, pp. 191-210.)。この中で、ストライプス・バーク等、「幅広い基盤に基づいた(broad-based)」組織化という言葉を用いているが、IAFが支援する地元計画はまさに会衆からのものである。そのため、組織化努力は信仰よりも一歩下がる。ハートは、「(Hart, *Cultural Dilemmas of Progressive Politics*, *ibid.*, p. 255.)」が、ポール・オスティーナー等のモデルの中心的要素が、会衆組織を媒介とした組織化である。その指摘によると(Osterman, *Gathering Power, op. cit.*, p. 119.)。

(25) Shirley, *Community Organizing*, *op. cit.*, p. 48.

(26) Michael Gegan, Grant Lindsay, and Lucill Clark, "East Brooklyn Congregations," Unpublished leaflet.

(27) アリスキーは、「相当な数以上の部分的リーダーがコマーチャル上に存在して、彼らがコマーチャルの資源を動員して、地域の学校や近隣住区を発展させることが重要だ」と、彼らの全ての人ひとの間に「自然に存在する集団において、自然に生まれた無名のリーダー (the small natural leaders of the natural groups)」や「こじのヒュー (Little Joes)」

スー・アルinsky (Saul D. Alinsky, *Reveille for Radicals*, New York: Random House, 1969 [1946], p. 74. [昭和秀世記『市民運動の組織論』未来社、一九七一年、一四四頁])。

- (28) Warren, *Dry Bones Rattling*, *op. cit.*, p. 7.
- (29) Shirley, *Community Organizing*, *op. cit.*, p. 49. 『アーチーの書名』論文名は挙げないが、リハーツの表現は多くの文献に見られる。
- (30) Warren, *Dry Bones Rattling*, *op. cit.*, p. 51.
- (31) Ernesto Cortes, Jr., "Reweaving the Fabric: The Iron Rule and the IAF Strategy for Power and Politics," in Henry G. Cisneros, ed., *Intervenir Destinies: Cities and the Nation*, New York: W. W. Norton, 1993, p. 299.
- (32) *Ibid.*, p. 295.
- (33) 政治に対するIAFの草の根的自覚の様を、『ネイショナル』誌のウイリアム・グライダーは次のようないくつに描いている。「会合はいくつも何時間も何時間も話しておもた耳を傾ける——政治的関係をくみ上げる過程は、個人的関係を生み出すのに必要なところに精力を使う。……(中略)……アーネスト・コルテスが中心的な教師役を果たしたが、また本質的にリーダードゥーアードゥーだった。やがて活動的な市民からなる聴衆は強烈な意見と活動計画で溢れていて、耐えきれず反乱を起るのではな、かと思いつつ不思議でならない」(William Greider, *Who Will Tell the People: The Betrayal of American Democracy*, New York: Simon & Schuster, 1992, p. 232. [中島建語『アメリカ民主主義の裏切られ』——誰が民衆に語るのか】青土社、一九九四年、三〇七頁)。ウォーレン、ハリー・ボイトが最初にIAFに注目した点は評価しつつも、彼らは彼らの市民運動系研究者や活動家が、IAFを畏る市民が公共目的のための協働し合つ「良き草の根団体」と見立てる限界を指摘する(ボイド、ブース、マク、*Citizen Action*, *op. cit.* [前掲証書] のほか、*The Backyard Revolution: Understanding the New Citizen Movement*, Philadelphia: Temple University Press, 1980, *Community Is Possible: Repairing America's Roots*, New York: Harper & Row, 1984, *Commonwealth: A Return to Citizen Politics*, New York: Free Press, 1989 なども参照)。IAFが持つ(参加の権威)を多層的に構造化した、それが(腹筋)的ネットワークともいふ、クライダーが「アーネストが、やがて活動的な市民からなる聴衆」=民衆が「耐えきれず反乱」を起すかと見紛つてしまふに極めて活発に草の根民主主義を実践するのだろう。ボイトらに見える「ハーツの構造」を

が、マーク・ウォーンが「AEを扱った著書」³³⁾ *Dry Bones Rattling* に「タメを付いた意図」がある（ウォーンは）
「ハタシハ一[1]〇一〇年一〇月四日、於ハーバード大学マーク・ウォーン研究室」にての其が確認済み）。

- (34) Mary Beth Rogers, *Cold Anger: A Story of Faith and Power Politics*, Denton, TX: University of North Texas Press, 1990, p. 96.
- (35) Warren, *Dry Bones Rattling*, *op. cit.*, p. 36. 一AEが、政治、エンジニアリング、教育、公衆衛生、ライダーハウス相互的な公共的説明責任の「壁」を打破する文脈で何度も繰り返す交渉や提携、COAのが制度化した公職者の「成績責任の集会」(accountability session)」「成績責任の夕べ」(accountability nights)」(Carmen Sirianni and Lewis Friedland, *Civic Innovation in American: Community Empowerment, Public Policy, and the Movement for Civic Renewal*, Berkeley, CA: University of California Press, 2001, pp. 50-51.) が、この作業は非常に重要である。
- (36) Warren, *Dry Bones Rattling*, *ibid.*, p. 9.
- (37) Warren, *ibid.*, pp. 28 & 70.
- (38) *Ibid.*, p. 35.
- (39) 原田禪「『誰もがいのち』」ハロ・チャーチル、前掲訳書『失われた民主主義』、1159頁。
- (40) Cortes, "Reweaving the Fabric," *op. cit.*, pp. 305-307.
- (41) Jane R. Eisner, "No Paintbrushes, No Paint," in E. J. Dionne, Jr., ed., *Community Works: The Revival of Civil Society in America*, Washington, D. C.: The Brookings Institution, 1998, Chapter 11. 参照。